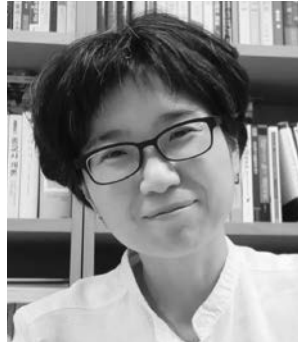


# コメント..境界を行き来することと境界を壊すこと

―ディアスポラと記憶―

成均館大学校史学科助教授  
韓 鈴 和 (ハン・ヨンファ)



国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) によれば、世界では毎年一六〇万人の難民が発生し、二〇二三年時点で強制的に移住を余儀なくされた人々は約一億一七三〇万人に上る。韓国社会では、二〇一八年のイ

エメン出身者約五百人の難民申請が報道を通じて広く知られ、難民受け入れを巡る賛否の議論が盛り上がった。この背景には、ムスリムに対する偏見や経済的競争への懸念がある一方、人道的観点からの受け入れ主張も存在する。

こうした反応の根底には、外部者に対する恐怖や排他意識がある。このような境界意識は古代から現代に至るまで一貫して見られる。特に近代化を経て単一民族というアイデンティティが強調されるようになると、外部の人に対する排他的な思考が量産された。移住民の増加を受け、個人や集団の多元性を認める努力も進んでいるが、嫌悪と差別の問題は根深い。朴芝賢先生と朴俊炯先生の発表を通して、今日の遺民に対する差別と嫌悪をどのように解決していくのか考えてみたい。

歴史的にディアスポラは、迫害や労働移動、文化交流など多様な形で生じてきた。百済滅亡後の遺民もその一例である。朴芝賢先生の意見に大きな異議はないが、百済が滅亡した際に唐や新羅、倭に移住した人々をディアスポラと説明できるかが気になった。また、唐に渡った最大二万人に及ぶ遺民のうち、支配層は雑居生活を送った一方、一般民衆は強制移住による分居の形を取ったため、同じ遺民でも経験や記憶が異なると思われる。これらの違いはどう説明できるのだろうか。

在朝日本人は、植民地の中で独自の境界を築き、居住地や社会的立場によって異なる経験をした。旗田巍と玉川一郎はその例である。旗田の場合、第一世代として親はどのように移住したのか。また、在朝日本人が自己同一性を形成する際、本土と植民地のどちらを中心に据えるのかという問題についても見解を伺いたい。さらに、境界を崩す方法とはどのようなものなのか。山田昭次が日常生活を生きる朝鮮人を通じて「境界のない世界」を見出したと評価されているが、その具体的な意味についてもご説明いただければと思う。

## プロフィール

●成均館大学校にて文学博士を取得。韓国古代の法制度、思想と文化などを中心に法と倫理の歴史的交脈、制度としての法、儀礼を扱う行政機関の起源と運営についての研究を行っている。おもな業績に「韓国古代社会における法の形成と体系化」(『歴史文化研究』六九、龍仁、二〇一九)、「新羅社会における『孝』倫理と統治理念」(『史林』八九、ソウル、二〇二四)などがある。